

第2回金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会

日時：令和4年12月16日（金）13:00～15:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議題

(1) 博物館ゾーン整備基本構想について

【配付資料】

資 料1：金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

資 料2：金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想（概要版）

第2回金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会
出席者名簿

日時：令和4年12月16日（金）13:00～15:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

■ 構成員 (五十音順、敬称略)

氏名	所属	備考
木下 直之	静岡県立美術館館長 神奈川大学特任教授	
古池 嘉和	名古屋学院大学現代社会学部教授	
佐々木 雅幸 (リモート)	金沢星稜大学特任教授	
田沢 裕賀	大分県立美術館館長	

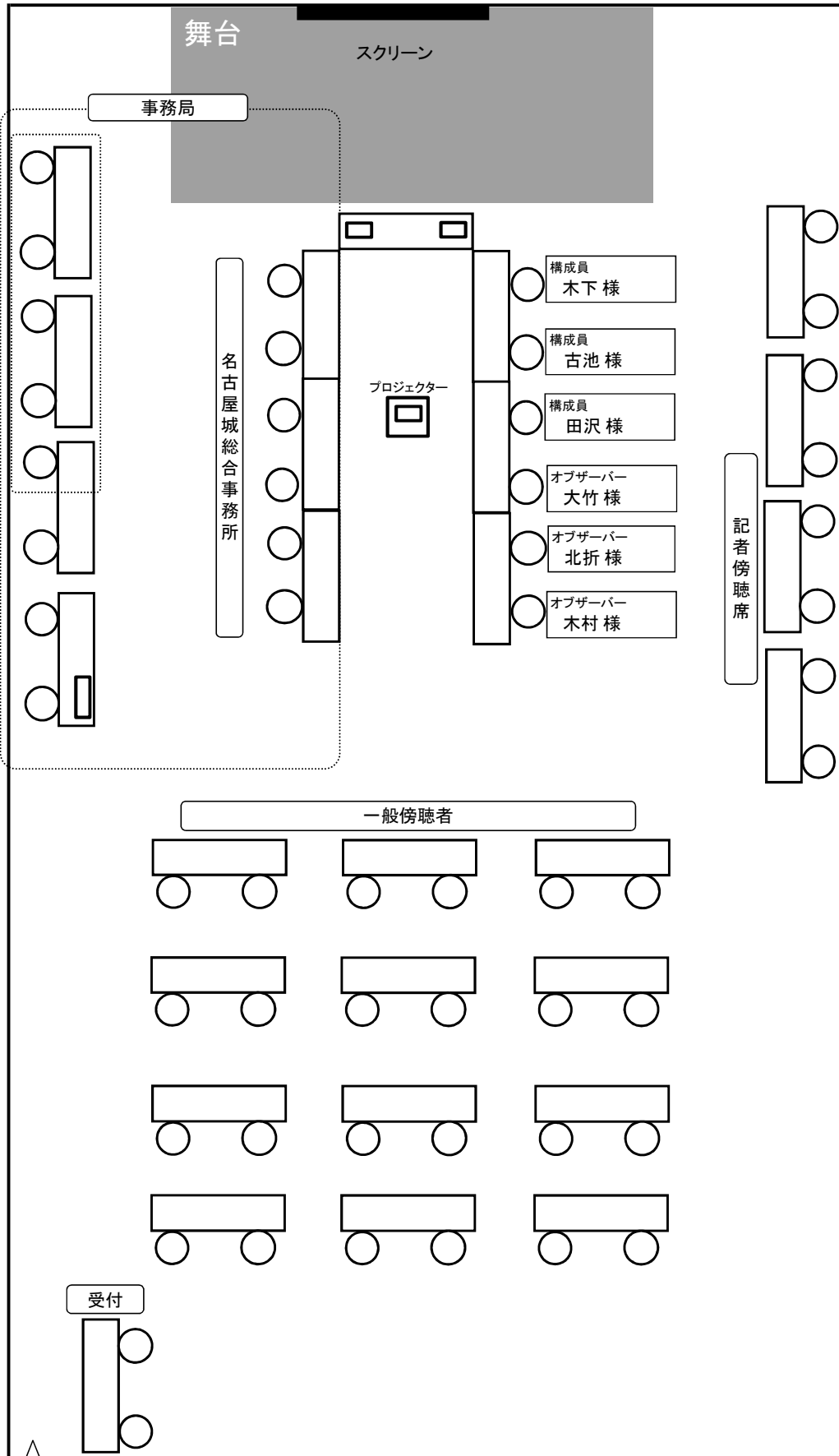
■ オブザーバー (五十音順、敬称略)

氏名	所属
大竹 正芳	名古屋商工会議所 商務交流部長
北折 真人	公益財団法人名古屋観光コンベンションビューロー 専務理事
木村 広聖	名古屋市博物館副館長

第2回金シャチ横丁第二期整備博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会

座席表

令和4年12月16日(金)
13:00~15:00
名古屋能楽堂 会議室



金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

1 事業の経緯

区 分	内 容
平成24年度	「世界の金シャチ横丁（仮称）基本構想」を策定
平成29年度	第一期整備事業完了及び開業
平成30年度 ～令和元年度	第二期整備事業化に向けた調査および検討に着手
令和 2年度	展示施設に関する事例調査
令和 3年度	博物館基本構想策定に向けた事例調査・検討
令和 4年度	博物館基本構想の策定

2 令和4年度のスケジュール

区 分	項 目	内 容
令和4年 8月	第1回 ワーキング	基本構想第1章、2章、4章
令和4年10月	第2回 ワーキング	基本構想第1章、2章、4章
令和4年12月	第2回 懇談会	基本構想第1～4章
令和5年2月（予定）	第3回 ワーキング	基本構想第5章、6章
令和5年3月（予定）	第3回 懇談会	基本構想第1～6章

3 今後の予定

区 分	内 容
令和4年度	博物館基本構想の策定
令和5年度～	博物館基本計画の策定 設計、工事、竣工

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

第1章 はじめに（前提条件の整理）

1 はじめに

(1) 序

本市では、尾張名古屋のシンボルである名古屋城及びその周辺の魅力を一層向上させ、国内外からの来訪者に対して名古屋の魅力の発信に加え、にぎわいの創出を目的とした「金シャチ横丁構想」を推進しており、平成30年（2018）3月には第1期整備として、名古屋の食文化を楽しめる飲食施設等を開業した（正門側に義直ゾーン、東門側に宗春ゾーン）。

引き続き第2期整備の一つとして、名古屋城の収蔵品等を活用し、名古屋城の歴史や価値・魅力を伝えるとともに、日本の城郭の特徴を検証・紹介する、城に関する総合的な博物館である名古屋城博物館（仮称）及び周辺の整備（以下「本事業」）を検討している。

今後、更なる整備が進む特別史跡名古屋城跡と一体となって、「尾張名古屋の歴史探訪の基点」となることを目指し、本博物館を中心としたエリア（博物館ゾーン）の整備方針等を基本構想として策定する。

(2) 本事業が必要とされる背景

○名古屋城整備事業からみた背景

- 本市では「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」に基づき、修復・整備を進めている。
- 姿を変えていく名古屋城の価値や魅力を発信する場が現状において不足していることに加え、天守の木造復元により失われるガイド機能についても継承する必要がある。

○名古屋観光からみた背景

- 本市の主要な観光資源の中で、名古屋城は認知度・訪問意向・体験割合ともに最も高い一方、魅力を感じられていない回答も一定数ある（「観光イメージの希薄さ」「魅力ある観光地が少ないこと」等）
- 名古屋城での滞在時間の短さの解消を図りつつ、文化観光拠点として市内観光をけん引する役割を担う。

(3) 本事業の目的

○名古屋城の価値や魅力の発信及び後世への継承

- 名古屋城は、城に関する記録が多岐にわたって遺されていることから、これら史料群を適切に保存するとともに、新たに収集し、調査研究を行い、貴重な文化資源を確実に後世に伝えていく。
- また、市民に名古屋城がたどってきた足跡を示し、その歴史的な価値への再認識を促す。

○日本の城郭の価値や魅力の発信

- 名古屋城は、日本最大級の建築規模を誇る天守を擁し、城郭御殿の最高傑作とされる本丸御殿を有する城として、日本の城郭史上、近世城郭の代表的な城であり、そのような名古屋城を紹介する博物館だからこそ、日本の城郭の特色と歴史を発信する意義があり、日本の城郭をより深く知ってもらう。

○名古屋観光の魅力向上

- 天守の木造復元をはじめとした名古屋城整備と一体となって、名古屋随一の観光地である名古屋城の魅力を一層向上させ、さらなるにぎわいを創出する。
- 文化観光拠点として、近隣の文化施設や地域と連携・協力し、名古屋城を基点として市内の他史跡や施設へ誘う機能を設けることで、観光客誘致に相乗効果をもたらすと同時に、地域の活力向上に寄与する。

(4) 博物館に求められる新たな役割

近年の博物館は、博物館法に定められた「社会教育施設として、資料の①収集・保管、②展示・教育、③調査・研究」といった本来の機能に加え、地域振興や観光、社会的包摂、福祉など、地域の課題への対応といった複雑化・多様化した社会的役割が求められている。令和4年（2022）に博物館法の一部を改正する法律が成立し、改正法では「博物館の事業に、博物館資料のデジタル・アーカイブ化を追加することとともに、他の博物館と連携すること、及び地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力向上に取り組むこと」が掲げられている。名古屋城博物館（仮称）（以下「本博物館」）においても、このような時代の変化に対応し、これからの時代にふさわしい博物館像が求められている。

2 歴史の変遷（名古屋城及び対象想定区域）

名古屋城の築城は、慶長15年（1610）より西国・北国の諸大名20家を動員する公儀普請で実施された。築城以前及び築城後の近現代から戦後復興、現代までの歴史は下表の通りである。本博物館の整備候補区域には、江戸時代、「三之丸東照宮（徳川義直によって父・家康公の菩提を弔うため建立され、創建当時は3600坪の広さを誇り、権現造の本殿、渡殿、楼門、唐門、透塀、築所、社務所等があった）」と「亀尾天王社」が立地していた。現在、整備候補区域北東部には、「安養寺」の庭園遺構と伝わる築山の一部や、中央部には東照宮当時の植生とされる「オガタマノキ」が現存しているほか、南東隅には陸軍旧第三師団司令部の煉瓦塀、軍人勅諭下賜時の記念樹といった陸軍関連遺構も遺されている。

【名古屋城と名古屋の歴史】

年	出来事
永享五年（一四三三）	この頃、記録に名古屋城の存在が確認できる。
大永年間（一五二一～二八）	今川氏親、那古野城を改修し、子の氏豊を置く。
天文七年（一五三八）	この頃、織田信秀、今川氏豊を退治し、那古野城を攻略し、居城を勝幡より那古野へ移す。
天文十二年（一五四三）	織田信長、清須城を奪取し、居城を那古野から清須へ移す。
慶長五年（一六〇〇）	徳川家康、名古屋築城を命じる。
慶長七年（一六〇二）	天守竣工する。
慶長一〇年（一六〇五）	本丸御殿竣工する。
元和六年（一六二〇）	尾張徳川家初代義直、本丸御殿より二之丸御殿へ移る。
寛永二年（一六二五）	本丸御殿を増築し、三代将軍家光を迎える。
宝暦五年（一七五五）	天守石垣普請・天守修理が完成する。
文政五年（一八二二）	尾張徳川家一〇代齊朝、二之丸御殿および庭園を大改造する。
慶応元年（一八六五）	一四代将軍家茂、本丸御殿に宿泊する。
明治四年（一八七一）	陸軍省により名古屋城は新政府へ引き渡される。
明治五年（一八七二）	金輪が東京へ運ばれる。
明治七年（一八七四）	名古屋城を陸軍省所管とする。
明治八年（一八七五）	濃尾大震災により、被害を受ける。
明治九年（一八七六）	名古屋城本丸と西之丸の一部を名古屋藩宮とし、陸軍省から宮内省へ所管替えとなる。
明治十二年（一八七九）	宮内省より名古屋へ名古屋城が下賜され、城郭建築として初の国宝に指定される。
昭和五年（一九三〇）	名古屋城が一般公開される。
昭和六年（一九三一）	名古屋空襲により、城内の主要な建造物が焼失する。
昭和十年（一九四五）	名古屋城が国指定特別史跡となる。
昭和十七年（一九四二）	天守閣・小天守閣の再建工事が竣工する。
昭和四十四年（一九六九）	本丸御殿が再建される。
平成三年（二〇一〇）	西之丸庭園全域が国指定名勝に追加指定される。
令和三年（二〇二〇）	西之丸御殿空廊（一番御殿・四番御殿外観復元）が開始する。

3 現代における名古屋城

(1) 歴史・建築の観点からみた名古屋城の意義

名古屋城は、近世城郭築城技術の完成期に公儀普請によって築城された姿を現代に伝えている数少ない城郭の一つであり、管理者が変遷する中でも、各時代に応じた保存がされてきており、現存する遺構から往時の姿を見られる歴史的価値の高い城跡である。さらに、名古屋城には、城に関する記録が多岐にわたって遺されていることから、豊富な史料に基づいた、史実に忠実な復元が可能である。そのため、本市では「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」に基づいた保存・整備を行い、名古屋城の価値や魅力を具現化していく。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

(2) 市民からみた名古屋城の価値・意義

○認知度の高さ

名古屋城は、本市を代表する観光地として多くの来場者を集めている。令和3年(2021)度に全国の18～79歳の男女1,113人に行われたアンケート調査^{注1}(以下「全国アンケート調査」)によると、79.6%が「名古屋城」を知っている。さらに、名古屋城への訪問・体験割合が39.3%、訪問・体験意向が42.7%と名古屋の主要観光資源ですべてにおいてトップであり、全国的に認知された観光資源である。

【名古屋の主要観光資源(全国アンケート調査結果)】

観光資源	認知度	体験	訪問意向
名古屋城	79.6	39.3	42.7
金シャチ横丁	19.9	13.7	22.7
徳川美術館	21.1	13.3	20.5
熱田神宮	49.4	25.9	28.3
四開道	4.9	4.6	4.2
リニア・鉄道館	19.5	9.5	16.6
トヨタ産業技術記念館	20.9	8.9	14.4
ノリタケの森	16.3	5.8	12.4
名古屋科学館(プラネタリウムなど)	16.5	9.3	10.3
白鳥庭園	6.1	2.9	9.2
名古屋港(名古屋港水族館、シートレインランド、ポートビルなど)	25.9	12.0	17.0
東山動物園	40.8	12.2	23.3
久屋大通公園(ヒサヤオオドリパーク、オアシス21など)	22.9	20.1	12.2
名古屋まつり	8.9	3.9	6.7
にっぽんど真ん中祭り	7.7	3.5	5.2
世界コスプレサミット	5.9	2.1	4.9
名古屋おもてなし武将隊	10.1	2.1	6.0
その他	0.1	1.4	0.9
知っているものはない	10.8	18.4	8.4

○市民の来訪

名古屋城は市民が繰り返し訪れる場所であり(名古屋市の入込客数(2,330万人)の居住構成を市の調査結果(全国アンケート調査)でみると市内が35%以上(818万人)ノ令和4年(2022)度に名古屋市在住の男女500人に行われたアンケート調査^{注2}(以下「市民アンケート調査」)によると、今までに名古屋城に行った回数は5回以上と答えた人が半数を占めているうえ、最近名古屋城に行ったのは1年以内である人が30%以上であり、季節毎の植栽の観賞や散歩など、市民の日常に根差した活用がなされている。

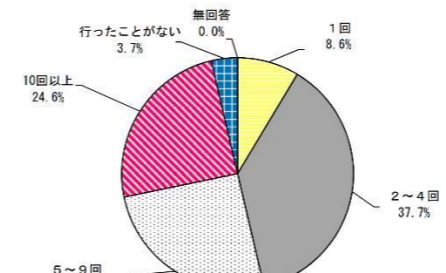
四季折々のお祭り(名古屋城春まつり、夏まつり)や各種イベント(菊花大会、つばき展、にっぽんど真ん中祭り)の会場となっており、市民に広く利用され、愛されている城である。名古屋城は、市外や観光客だけでなく市民に寄り添い、市民からも愛され支持される場所となっている。

○市民が捉える価値

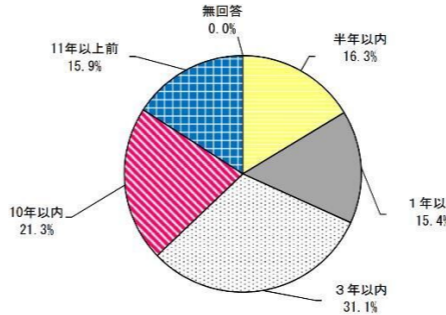
歴史的変遷にて整理したように、特に近代以降、名古屋城は名古屋市民にとってより身近な存在となり、名古屋のシンボル、誇りとして親しまれることとなった。戦災により天守をはじめ城内の主要建造物の大半が焼失したが、観光面での期待も高く、市民の機運の高まりを受け、昭和34年(1959)、市制70周年記念事業として大天守・小天守閣等は再建された。再建に向けた募金活動は広く県下で行われ、愛知県をあげての一大事業となり、再建された名古屋城天守閣は名古屋の街や戦後復興の象徴となった。このように名古屋城は市民の心のよりどころ、名古屋のシンボルとして市民に親しまれる存在となっている。

注1: 名古屋市観光文化交流局「名古屋市観光客・宿泊客動向調査2021年 概要版」(令和4年10月)
注2: 名古屋市観光文化交流局「令和4年度第6回ネット・モニターアンケート」(令和4年10月)

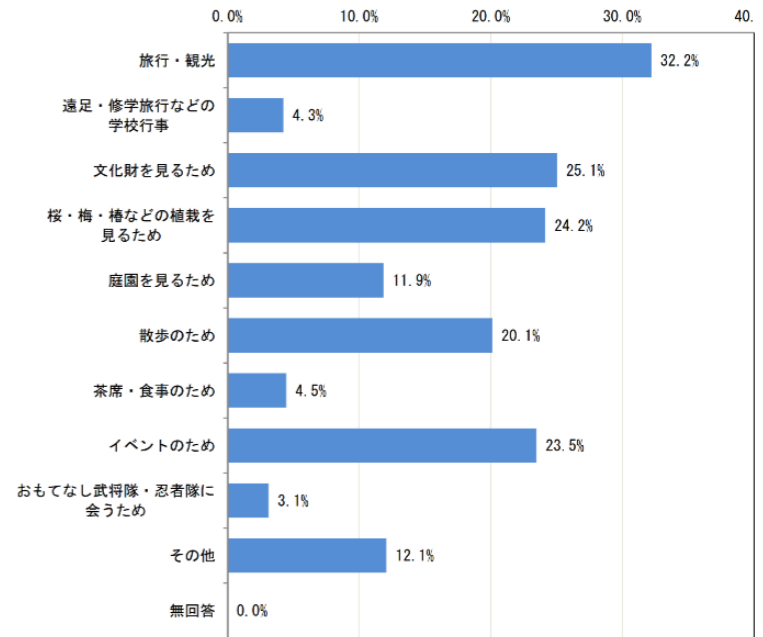
【今までに名古屋城に行った回数】



【最後に名古屋城に行った時期】



【最後に名古屋城に行った時の理由】



○名古屋及び名古屋城の課題

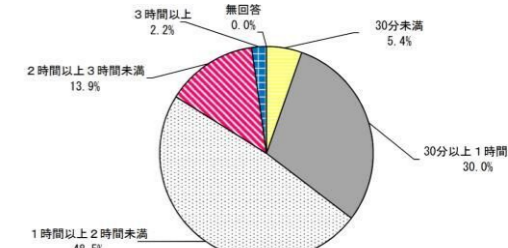
名古屋の観光地としての魅力を感じない(全国アンケート調査では、「魅力を感じる」が53.9%、「魅力を感じない」が14.2%、「どちらともいえない」が31.9%)理由として、「観光イメージが希薄である」「名古屋の魅力が全国的に十分知られていない」が指摘されており、観光地としての魅力を発信していく必要がある。

さらに、名古屋城の滞在時間の短さを解消すべく、今後の名古屋城周辺地域のさらなる発展を見据え、既設の金シャチ横丁や名城公園と一体的に楽しめる観光コンテンツも併せて充実させる必要がある。

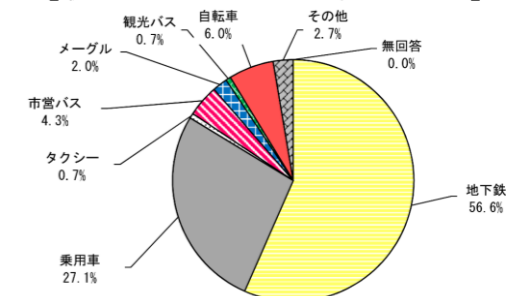
【名古屋に観光地としての魅力を感じない理由】

理由	割合
他の観光都市と比べて観光イメージが希薄であること	39.9
名古屋の魅力が全国的に十分知られていないこと	20.9
名古屋の魅力が市民に十分知られていないこと	5.1
魅力ある観光施設が少ないこと	34.8
魅力あるイベントが少ないこと	7.0
魅力ある食べ物・飲食店が少ないこと	10.8
魅力あるおみやげ品が少ないこと	5.7
交通アクセスが良くないこと	3.8
施設に楽しめる場所が少ないこと(観光施設の開館時間が早いことなど)	2.5
観光客と接する事業者などの観光に対する意識が低いこと	2.5
まちがきれいでないこと	2.5
まちに緑が少ないこと	7.6
その他	3.8

【名古屋城内を回るのにかけた時間】



【最後に名古屋城に行った時の交通手段】



金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

(3) 今後の名古屋城及びその周辺

整備候補区域からまちへの回遊性を向上させる取組みとして、名古屋城を中心とした観光体験の創出（堀川の水路軸を活かした観光体験（堀川水上バス、平成23年（2011）10月運行）や名古屋城の広大なスケールの水堀を体感し、歴史的景観を楽しめる体験（水堀での舟の周遊ツアー等）等）がある。また、SRT構想と連携した名古屋駅及び尾張地域全域をつないだ周流ルートの構築（流通拠点だった名古屋城周辺の歴史を踏まえ、令和2年（2020）に「尾張藩連携事業推進協議会」設立に向けた結団式を実施し、海外からの集客はこれまでのアジアに加え、欧米豪にも力を入れ始めている）等、都心のまちづくりと一体となって将来像を描くことが求められる。

4 整備候補区域の条件の整理

整備候補区域は、名古屋駅から地下鉄桜通線「久屋大通」駅で乗り換え、地下鉄名城線「名古屋城駅」下車徒歩約10分でアクセス可能である。

本事業の整備候補区域は、金シャチ横丁の南側にある、敷地①（約7,283㎡）、敷地②（約5,815㎡）、敷地③（約2,838㎡）及び敷地④（約667㎡）とする（以下、本事業の整備候補区域を「博物館ゾーン」と呼称する（但し、本事業の整備区域は今後確定）。なお、既存金シャチ横丁の一部は遺跡部分である。）。整備候補区域は都市公園である「名城公園」に含まれるため、都市公園法の順守、各種都市計画規制（市街化区域及び市街化調整区域、用途地域、容積率、建ぺい率、高度地区、風致地区等）、名城郭内処理委員会申し合わせ事項等の規制項目に従う必要がある。

第2章 整備にあたっての基本的な考え方

1 博物館ゾーン及び本博物館に求められる機能・役割

名古屋城天守閣は再建以来、名古屋城の歴史及び構造について紹介する博物館として、重要文化財「本丸御殿障壁画」を含む数多くのコレクションを展示・公開してきたが、名古屋城天守の木造復元にあたり、天守内は木造構造の技術と美を紹介する空間とし、ケースによる展示空間を設けない計画である。このことを前提として、博物館ゾーン及び本博物館に求められる機能・役割を整理する。

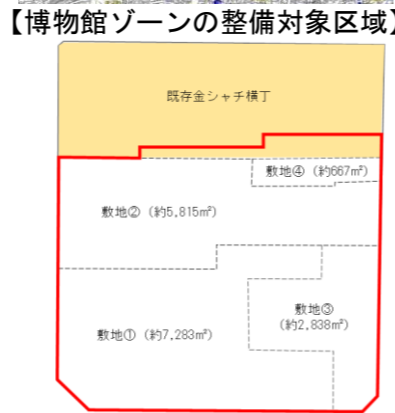
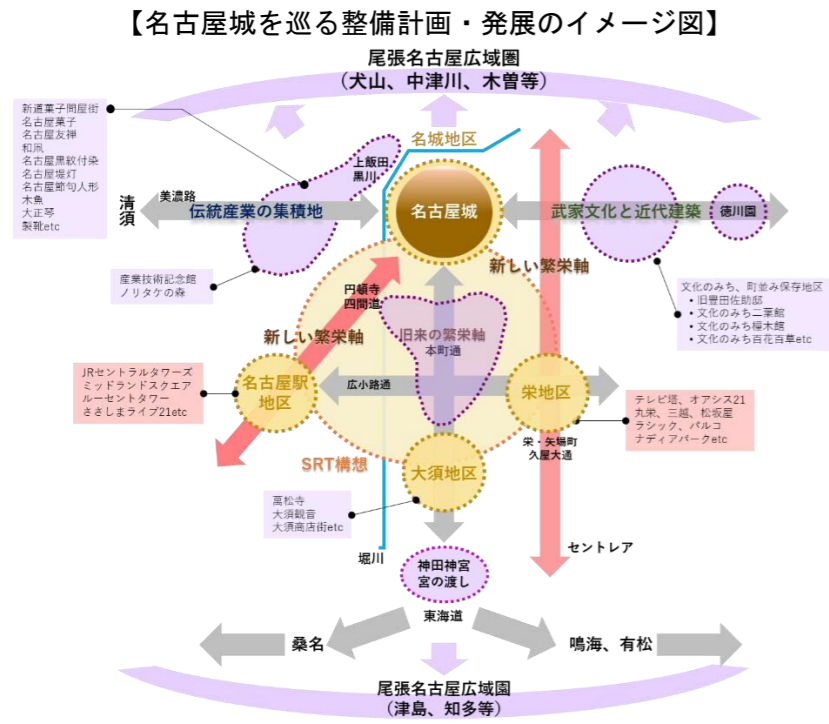
(1) 博物館ゾーンに求められる機能

博物館ゾーンがもつ歴史性や場所性（立地の特性）といった特性を踏まえると、博物館ゾーンには、主に次のi) 知の拠点（学習・教育及び情報発信機能）及びii) 観光の基点の機能が求められる。

【博物館ゾーンに求められる機能】

i) 名古屋城と一体となって、名古屋城の歴史や価値と魅力、日本の城郭の特徴を伝える「知の拠点」
 ii) 名古屋観光の受入・周遊拠点として、市内観光へと誘う「観光の基点」

歴史性	● 義直が父・家康公の菩提を弔うために三之丸東照宮を創建した場所	● 尾張藩にとって重要な意義がある場所	① 知の拠点 名古屋城・名古屋城下町の歴史、魅力、価値を伝えるのにふさわしい場所
	● 城の総鎮守、城下町の氏神として親まれた亀尾天王社があった場所	● 町民にとって重要な意義がある場所	
	● 陸軍三師団司令部の煉瓦塀の遺構があった場所	● 戦争の時代を象徴・想起する施設	
場所性	● 名古屋城に隣接する立地	● 名古屋城と一体となり魅力向上に努める	② 観光の基点 名古屋観光の受入・周遊拠点として、市内観光へいざなう
	● 名古屋城は名古屋随一の観光地	● 観光客の受入・周遊拠点として整備する	
	● 隣接する金シャチ横丁や芝居小屋、名城公園との関係性	● 隣接施設と連携して周遊性を高める	



(市域内) 博物館ゾーンとしての整備候補区域
 ※区域は「世界の金シャチ横丁（仮称）基本構想」に基づく時点の想定
 ※金シャチ横丁にはみ出している箇所は遺跡部分



注：令和5年1月4日より現在の「市役所駅」から「名古屋城駅」に改名される予定。（以下、同様）

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

(2) 本博物館が果たすべき役割

博物館ゾーンの中核となる本博物館は、博物館ゾーンに求められる i) 知の拠点及び ii) 観光の基点といった機能を実現するための役割を担う。さらに、本博物館は登録博物館（博物館法）、公開承認施設（文化財保護法）を目指し、情報発信機能を備えた調査・研究の中心としての役割を担う社会的意義も求められる。

【本博物館が果たすべき役割】

機能	役割
知の拠点	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋城の歴史や価値・魅力を伝え、後世に継承する役割 日本の城郭の特徴を検証・紹介する役割
観光の基点	<ul style="list-style-type: none"> 国内外の、子供から大人までを対象とする施設（名古屋城随一の観光地） 最新技術や五感で体感できる（味わえる）展示内容の充実を図る 文化観光拠点として、名古屋城周辺の観光地を巡る際に、歴史的な背景や名古屋城との関連を想起できるよう、名古屋城を基点とした歴史を、ストーリー性をもって理解できる施設とする。

2 基本コンセプト

(1) 博物館ゾーンのコンセプト

博物館ゾーンは、隣接する金シャチ横丁義直ゾーンも含め、尾張名古屋の歴史や文化、周辺とのつながりを学び、名古屋城の価値や魅力を再発見し、それをきっかけに名古屋城周辺及び市内に足をのばしてもらえ、エリア全体として「尾張名古屋の旅の基点」となるような方向性を目指す。

【博物館ゾーンのコンセプト（案）】

名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ

- 名古屋城は、尾張名古屋の歴史の【入口（中核・シンボル）】
- 名古屋随一の観光地であり、観光客が必ず訪れる名古屋観光の【玄関口】であり、本敷地や博物館を【基点】に市内観光に足を延ばしてもらう
- 名古屋の都市基盤となる基盤割は、清須越（慶長15年（1610））に端を発する。名古屋の“まち”は、名古屋城が【出発点】
- 究極の近世城郭である名古屋城をきっかけに、日本の城郭に関心をもつ【きっかけ】

(2) 本博物館のコンセプト

近世、名古屋のまちは、名古屋台地の北端に徳川家康が名古屋城を築いた後、名古屋城とともに歩みを進めてきた。築城後のまちの繁栄や幕末の動乱期、戦後の混乱期から戦後復興まで、名古屋城は市民とともに歴史を歩み、時を刻んできた。実際、名古屋のまちは、築城の際の清須越の基盤割の上に名古屋城を基点として形成されていることに加え、名古屋城天守閣は戦後、まちの戦後復興の象徴として、市民の機運の高まりによって再建された経緯がある。現在でも、名古屋城は四季折々の祭りや季節イベントの会場となっているほか、市民アンケート調査結果で見られた通り、市民の昼食・散歩利用等の日常的な営みに根ざした場所である。このように、名古屋城は今までも、そしてこれからも名古屋のまちの発展を見守り、

市民とともに寄り添いながら歩いていく存在であると言える。

本博物館は、このように名古屋のまちとともに歩んできた名古屋城に隣接し、名古屋城の歴史や価値と魅力を伝えることを目的としており、そのコンセプトを「城に学び、城と歩む」とする。

【本博物館のコンセプト（案）】

城に学び、城と歩む

○「城に学び」に込めた意図

- 名古屋城の歴史や価値と魅力について学ぶことを通して、近世以降の名古屋のまちの軌跡をより深く知ることができる。
- 日本全国の城郭を学ぶことを通して、名古屋城の価値や魅力を再発見できる。
- 名古屋城では「城」そのものだけでなく、城の背景にある、土木技術、建築、自然史等のさまざまな複合的要素を学ぶことができる。

○「城と歩む」に込めた意図

- 名古屋城には、城に関する多岐にわたる記録が遺されており、これら史料群を収集・保存・調査研究を行い、名古屋城の価値・魅力を確実に後世に継承する。
- 戦災により城内の主要建造物の大半が焼失したが、再建に向けた募金活動は広く県下で行われ、名古屋城天守閣は名古屋の街や戦後復興の象徴となった。
- 名古屋城は四季折々の祭りや季節イベント（菊花大会やつばき展等）の会場となっていることに加え、市民の日常的な散歩にも使われる等、市民に広く利用され、愛されている城である。
- これまでも城と市民が寄り添いながら歩いてきた（関わってきた）ように、これからも名古屋のまち／市民は、名古屋城とともに歩いていくことを象徴的に表現している。

3 期待される効果

前述した博物館ゾーンのコンセプトを踏まえ、想定する来訪者層、および、本事業がもたらす名古屋城およびその周辺エリアへの定性的効果には、以下が期待できる。

【博物館ゾーンの想定する来訪者層及び期待される効果】

機能	役割
想定する来訪者層	<ul style="list-style-type: none"> 城郭などの歴史に関心が高い市民や観光客 観光やイベントを目的として名古屋城を訪れる市民や観光客
博物館ゾーンの整備により期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋城周辺エリアの魅力向上による来訪者の滞在時間増加とにぎわいの創出 名古屋城のガイダンス機能の確保による来訪者が名古屋城を学ぶ機会の保持 名古屋城に関する展示機能の拡充による来訪者への効用拡大 名古屋城に関する研究機能の拡充による市民・来訪者の名古屋城への理解促進 観光の基点の整備による名古屋の文化観光への貢献

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

第3章 博物館ゾーン概要

1 整備の方針

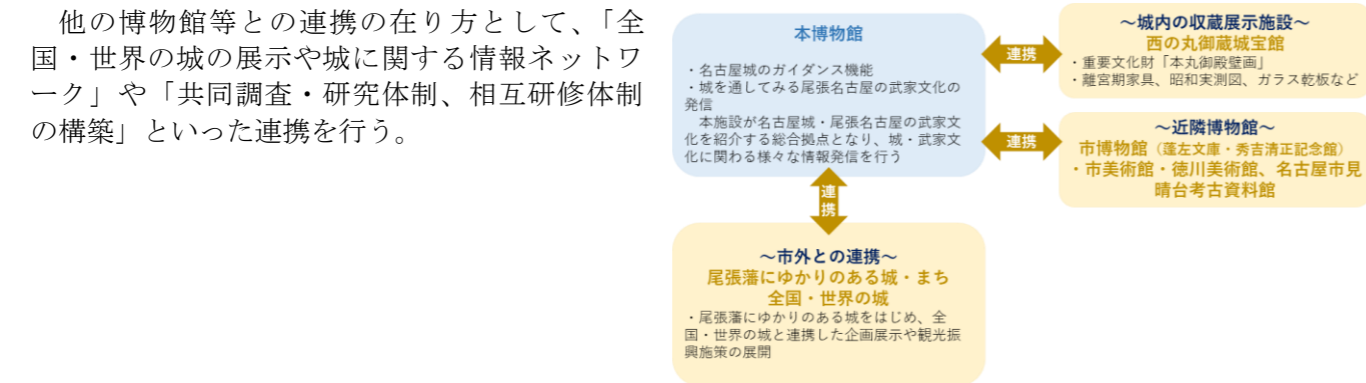
- 博物館ゾーンの整備方針
 - 名古屋城の全体像の理解や市内観光を促進するガイダンス機能を果たすため、来訪者を迎え入れ、送り出す玄関口となる位置に“知の拠点”の中心となる博物館ゾーンを整備する。
 - 名古屋城に隣接するという立地条件を踏まえ、名古屋城と一体となって、「尾張名古屋の歴史探訪の基点」となることを目指す。
 - 来訪者がストレスなく快適に過ごせるよう、施設環境や発信情報に対してユニバーサルデザインの視点を取り入れる。
 - 来訪者に気軽に立ち寄ってもらえるよう、有料ゾーンと無料ゾーンの区別を検討する。
- 本博物館の整備方針
 - 他施設と連携し、文化財等の資料を取り扱う企画展等の実施を見据え、国宝・重要文化財公開承認施設の要件を満たした環境を整える。
 - 特別史跡名古屋城跡の範囲外の敷地となるが、名古屋城の眺望を確保する等、名古屋城と一体感を感じられる施設とする。
 - 環境への負荷を低減しつつ安全に資料を保管できるよう、博物館 IPM^注の積極的な導入を図る。
 - 名古屋城や尾張藩ゆかりの建造物を敷地内に移設し、屋外博物館としての機能も取り入れる。

注：博物館資料を適切な保存環境で保持することで生物被害の防止を目的とする文化財管理の技術。外部からの害虫の進入、屋内での営巣・繁殖を防ぐために適した建築や設備を備えるとともに、適切な管理を行う。

【取り扱うテーマ（近隣の博物館との差別化）】

施設名	テーマ
■取扱うテーマ（近隣の博物館との差別化）	
名古屋市博物館	・「名古屋市」を中心とした主に尾張地域の旧石器時代から現代までを扱う歴史系総合博物館 ・国内外の歴史、文化を紹介
徳川美術館	・尾張徳川家に伝来した什宝・書籍を元に「大名文化」の用と美を中心に取り上げる
本博物館	・「名古屋城」「尾張藩」を中心に取り上げる ・名古屋城の歴史や価値と魅力 ・城を通して見る名古屋のまちや文化 ・日本の近世城郭を代表して全国・世界に日本の城郭の特徴を検証・紹介する
■位置づけ（城内における施設・展示施設との比較）	
天守・本丸御殿	・史実に忠実に復元された江戸期の姿を体感できる施設
西の丸御蔵城宝館	・重要文化財「本丸御殿障壁画」を中心とした資料の収蔵と、その収蔵品の公開を行う施設

【他の博物館等との連携の在り方】



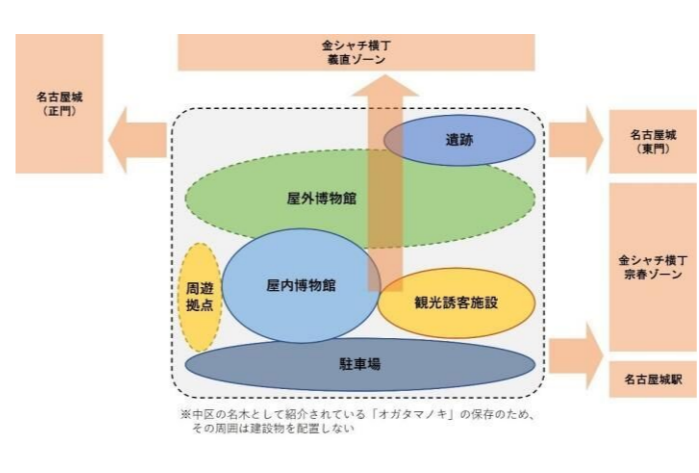
2 博物館ゾーン概要

前章で検討した事業内容を実現できるゾーニング・動線及び施設内外に必要な機能について、以下の通り整理した。既存動線として、金シャチ横丁義直ゾーン内の東西方向に最寄り地下鉄駅である名古屋城駅と名古屋城（正門）をつなぐ歩行者動線があり、また、出来町通から正門前駐車場への車両動線が築かれている。名古屋城の全体像をはじめ、その価値と魅力が理解しやすいよう、博物館ゾーン内における名古屋城のガイダンス機能と、名古屋城とをつなぐ動線を確保する。また、既存の歩行者・車両動線から博物館ゾーンへの誘導を図る。

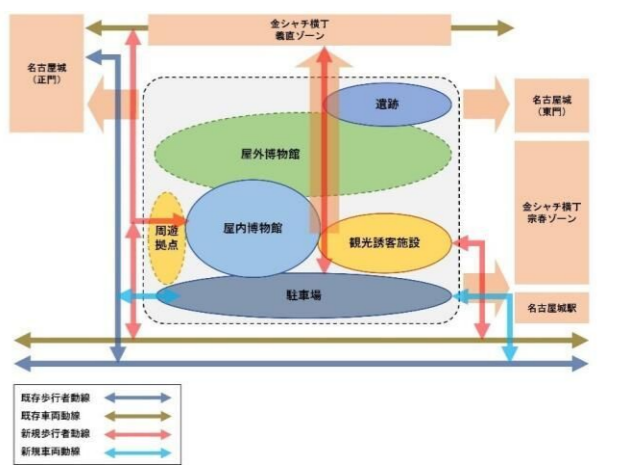
【整備対象区域のゾーニング】

施設	内容
屋内博物館	・これまで天守閣が担っていた博物館相当施設の機能を包含し、さらに発展させた施設として名古屋城の価値や魅力を発信するため、必要面積を確保できる配置を検討する。
屋外博物館	・遺跡の保全を考慮した緩衝帯としての役割や、金シャチ横丁義直ゾーンと博物館ゾーンをつなぎ、エリア全体の魅力向上に寄与する空間として屋外博物館を配置する。例えば、名古屋城の建造技術に係る展示等が想定される。 ・観光誘客に資する屋外展示の開催や、団体客・教育旅行者の屋外休憩所として活用するなど多目的に利用可能な広場を配置する。
遺跡	・整備候補区域はかつて三之丸東照宮と亀尾天王社の境内であったとされ、その名残とされる石積み・築山等が残されている。今後、発掘調査等を行い、その保全と活用について別途検討する必要がある。
観光誘客施設	・「名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ」としての博物館ゾーンの役割に鑑み、観光客誘致に資する施設を検討し、適切に配置する。
周遊拠点	・市内の他の歴史文化施設へとつなぐため、名古屋観光の受入・周遊拠点としての機能を確保する。
駐車場	・博物館ゾーン整備に伴ってエリア一帯への来訪者の増加が見込まれることから、周辺道路からの車両動線に考慮した十分な駐車スペースを確保する。 ・大型バスや観光バスによる来訪者にも考慮する。 ・博物館資料の搬入口についても確保する必要がある。また、資料動線に配慮し適切な配置を検討する。

【必要な施設のイメージ】



【整備候補区域における動線の考え方】



注：上図はともにあくまでもイメージであり、施設配置を示すものではない。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

3 本博物館に必要な機能

「知の拠点」の中心となる本博物館は、これまで現天守閣が担ってきた役割をさらに発展させるとともに、名古屋城と一体となり、名古屋城の歴史や価値を学ぶ拠点として、また、城郭研究の拠点として研究成果の発信を行う。名古屋城は城郭建築として初の国宝指定を受けた日本を代表する城であるため、その強みを最大限生かした展示企画を行うことや、名古屋城調査研究センターが実施している調査・研究等も踏まえ、例えば全国の城に関する展示を実施し、その中での名古屋城の位置づけを明確にすることで、インバウンド観光客の誘客や、名古屋城それ自体の価値を高めること等も考えられる。

以下に博物館ゾーンの核である本博物館に必要とされる機能及び諸室の検討内容を示す。

【本博物館に必要な機能・諸室】

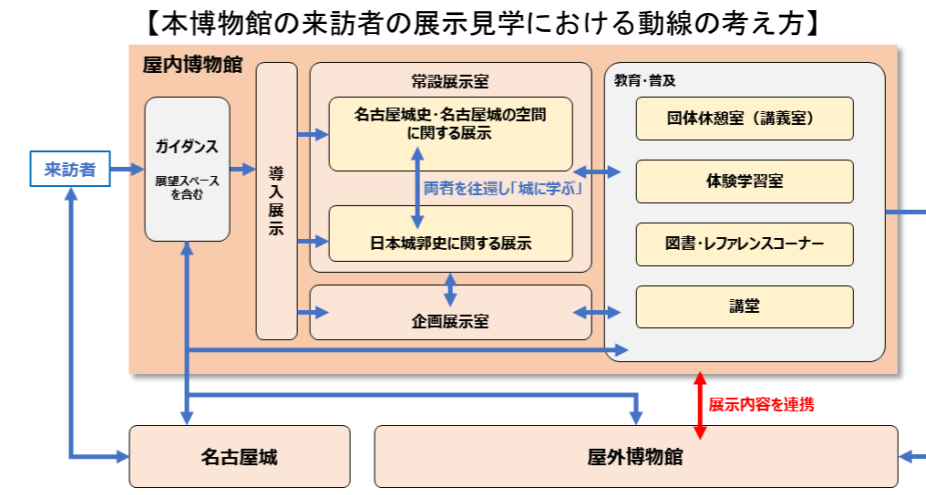
導入機能	内容 (諸室)
ガイダンス機能	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋城へ向かう正面玄関として、来訪者を迎え入れ、城跡の全体像を紹介するガイダンスを行う。 本市を代表する観光地として、ここでの体験や学びをきっかけに市内の他の観光地にも足を伸ばしてもらい周遊観光を促進するため、本市の魅力を発信する。 <p>【主な諸室：ガイダンススペース、観光情報スペース、展望スペース】</p>
展示機能	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋城に関する文化財を常時公開することを目的に、文化財の適切な保存・活用・調査・研究の成果を体系的に整理し、市民・来訪者等に向けての情報公開を行う。 実物資料と模型や映像等のコンテンツを効果的に組み合わせ、親しみやすく分かりやすい展示を行う。 <p>【主な諸室：常設展示室、企画展示室、展示準備室】</p>
教育普及機能	<ul style="list-style-type: none"> 展示機能と連動させ、さらに深い学びの活動を展開する。 調査研究センターが持つレファレンス対応をさらに深化させ、市民が交流しながらともに学ぶ、ラーニング機能の強化を図る。 <p>【主な諸室：団体休憩室、図書・レファレンスコーナー】</p>
収集保存機能	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い層から支持・継続利用されるために、名古屋城に関する情報及び資料の収集を継続的に実施し、文化財の保存・継承に務める。 <p>【主な諸室：収蔵庫、一時保管庫、トラックヤード・荷解室】</p>
調査研究機能	<ul style="list-style-type: none"> 日本の城を代表する近世城郭である名古屋城の価値と魅力を明らかにするため、日本・世界を対象とした城郭研究を進める。 本博物館を名古屋城の調査研究拠点として位置づけ、考古学・歴史学・美術史・建築史・庭園史などの分野を横断した総合的な調査研究を推進し、名古屋城の保存・活用を進めるとともに、その調査研究成果を広く情報発信していく。 <p>【主な諸室：整理作業室、調査研究室、写真撮影室】</p>
サービス機能	<ul style="list-style-type: none"> 交流空間として、トークイベントやギャラリーなど多目的に活用する。 <p>【主な諸室：受付・エントランス、ギャラリー】</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> 管理機能 (事務室、館長室、応接室、ボランティア控室、会議室 など) 共用部・その他 (トイレ、授乳室、警備室、倉庫、廊下、階段・EV、機械室等)

4 本博物館の観覧者動線の考え方

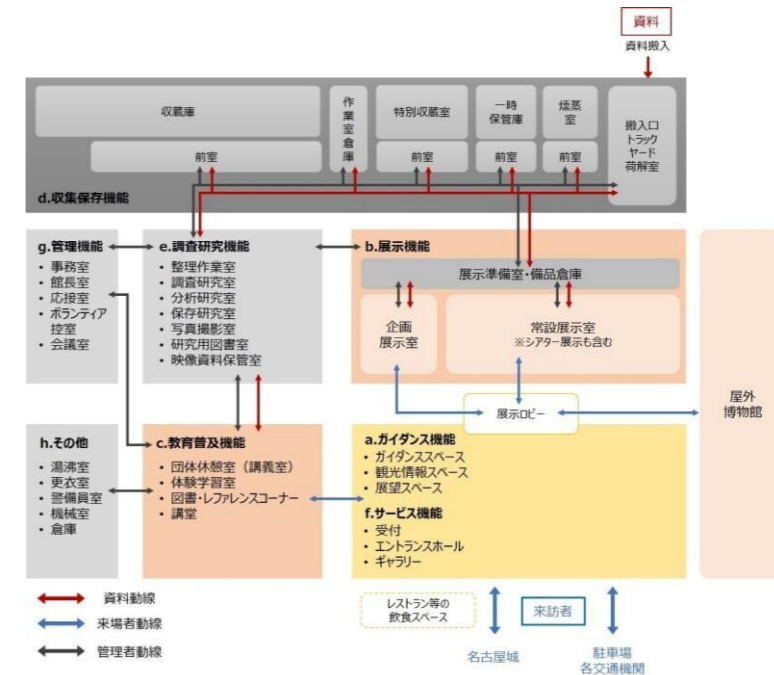
来訪者によって、本博物館内の順路が異なることを想定し、様々な巡り方ができるような自由動線を検討する。ガイダンスを起点に、来訪者が自由に展示を回れるようにしつつ、利用者サービス、教育・普及のプログラム等もあわせて、全体が相互補完的に連関する流れをつくる。

5 本博物館の諸室の機能構成

観覧者動線を踏まえつつ、下記の図に基づく機能配置や動線計画を想定する。特に、資料動線については、専用の搬入口を設置し、資料を安全に展示室まで移動できる独立動線とすることが重要である。



【本博物館の諸室の機能構成】



6 博物館ゾーンに必要な機能

来訪者が快適に名古屋城観光を満喫できる環境を整え、本市を代表する観光地として、さらなる観光行動や経済効果に寄与することを目指す。また、先行する金シャチ横丁第1期整備エリアや芝居小屋風多目的施設と一体的な整備を行い、「観光の基点」としての魅力向上を図る。

【博物館ゾーンに必要な機能】

導入機能	内容
観光誘客機能	名古屋城及び博物館ゾーンの誘客に資する機能を導入する。整備候補区域は名城公園内であるため、設置可能な施設は公園施設に限られる。
周遊拠点機能	市内の他の歴史文化施設へといざなうため、本博物館が担う名古屋城のガイダンスに加えて、市内観光の情報発信を行う機能を設ける等、来訪者の利便性を高めるインフラ整備を進める。
便益機能	将来の名古屋城及び博物館ゾーンへの来場者数を見据えた受入環境に必要な便益機能 (トイレ、駐車場、休憩施設など) を強化する。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について 【第2回 懇談会資料】

第4章 展示方針

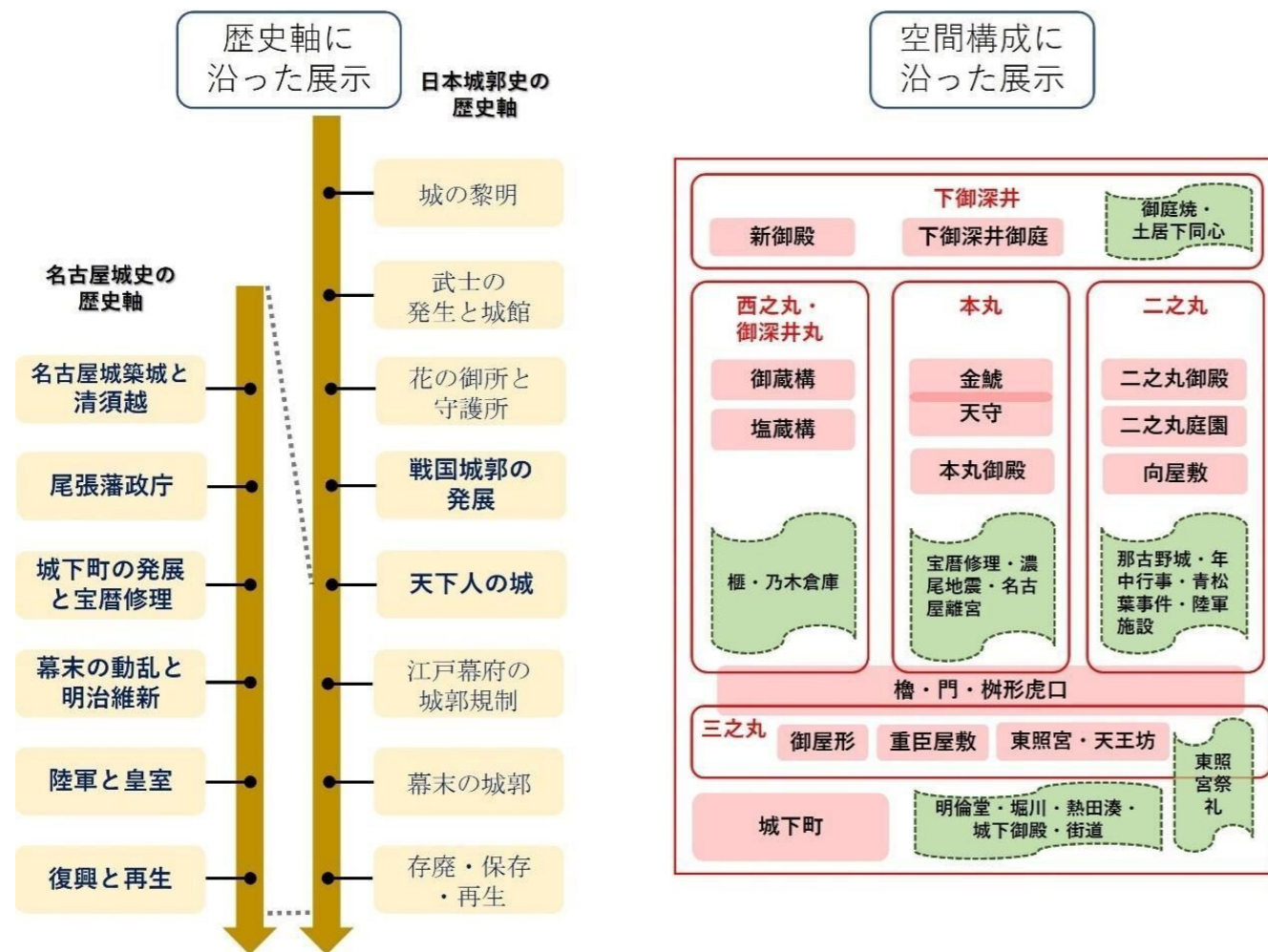
1 展示ストーリーの考え方

前述の導入機能のうち、展示機能にあたる諸室では、来訪者目線でわかりやすく展示を行う必要がある。そこで、前述のコンセプトや、名古屋城の歴史の変遷に基づき、本施設の展示ストーリーを構成する日本城郭史・名古屋城史・名古屋城の空間及び歴史的事象を下図に整理した。

本施設は、名古屋城が日本を代表する城であることから、名古屋城特有の歴史・事物に関わる展示のみならず、日本城郭史上の位置付けを明確にすると同時に、日本の城郭の展開についても明示することとする。

来訪者に対し、歴史軸に沿って名古屋城史・日本城郭史を学ぶ展示空間を展開し、併せて名古屋城の空間の歴史性・構造性を理解できる展示空間を提供する。また、名古屋城の他、日本の城郭に関する最新の調査・研究の成果を常に紹介する機能も併せ持つ施設とする。

【展示ストーリーを構成する日本城郭史・名古屋城史・名古屋城の空間】



2 展示の方針・全体構成・展示手法

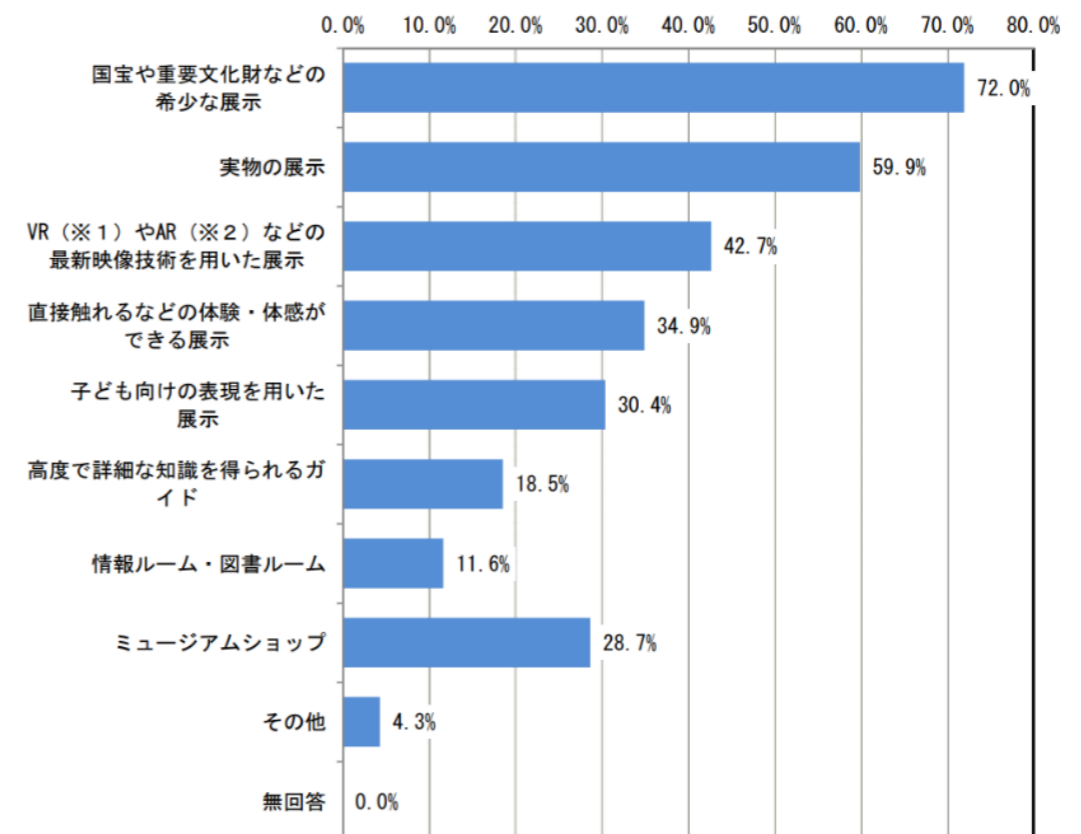
名古屋城や周遊観光のガイダンス施設を備え、名古屋城や日本の城郭を紹介する常設展示（屋内展示・屋外展示）や企画展示を行う。

展示空間では、名古屋城に関連する様々な実物資料を常時公開することを基本とし、理解の補助として模型・映像・グラフィック・IT・ICT等の最新技術を活用する。また、屋内展示のみならず、歴史建造物や工作物・原寸模型などを紹介する屋外展示空間を設け、三之丸東照宮の遺構を保存・公開する遺跡部分とともに一体的かつ効果的に整備し、名古屋城の総合的な価値と魅力を深める構成とする。

併せて調査研究を充実させ、市民講座・体験活動・リファレンスなどを通じて、市民や来訪者の知的好奇心を満足させる活動を継続的に実施する。

実際、前述した市民アンケート調査でも、本博物館に期待する展示や機能として、「国宝や重要文化財などの希少な展示」が最も多く（約72%）、次いで「実物の展示」（約60%）、「VR^{※1}やAR^{※2}などの最新映像技術を用いた展示」（約43%）と続き、来訪者（市民）に求められる展示や機能にも応えられている。

【本博物館に期待する展示や機能（市民アンケート調査）】



※1：VR（Virtual Reality）とは、一般に「仮想現実」と訳される。閉鎖された視界にCGを投影し、自分が仮想世界にいるかのような体験ができる技術のこと。

※2：AR（Augmented Reality）とは、一般に「拡張現実」と訳される。スマートフォンやタブレット端末などの機器を使用し、現実世界にCGを重ねて映し出す技術のこと。